

あった (62.5% vs 12.5%, $p < 0.01$)。⑤ VT 発生群では全例 EPS にて持続性 VT/VF が誘発されたが、非発生群では 2 例で誘発されず、5 例で非持続性 VT のみの誘発であった。

【結論】 VT/VF の既往がある例では再発率が高く、ICD/CRTD 植込み後も注意深い観察が必要である。LVEF、EPS、LP は致死性不整脈発生予測に有用であるが、どの指標も単独では限界があり、各指標を組み合わせると総合的に判断することが必要であると思われる。

P1-5.

中高年高血圧症例における上腕一足首間脈波速度 (baPWV) の臓器障害の指標としての有用性の検討

(大学院四年・内科学第二)

○松本 知沙

(内科学第二)

富山 博史、吉田 雅伸、山田 治広
椎名 一紀、山科 章

【背景】 左室肥大 (LVH) 及び頸動脈の内膜肥厚 (IMT) は高血圧による臓器障害の指標である。最近、上腕一足首間脈波速度 (baPWV) は簡便な検査として動脈硬化性疾患の診療に使用されている。本研究では中高年高血圧症例において臓器障害の指標としての baPWV の基準値について検討した。

【方法】 対象は東京医科大学病院を受診した 30 代から 60 代の高血圧症患者 (降圧治療群 219 人、未治療群 145 人) である。baPWV 測定、心臓超音波検査にて左室重量係数 (LVMI)、左室拡張機能 (E/A 比)、頸動脈エコーによる頸動脈内中膜壁厚 (IMT) 測定を施行し、ROC 曲線にて各種臓器障害の指標となる baPWV 値のカットオフ値を検討した。研究デザインは横断研究とした。

【結果】 治療群において、baPWV は、E/A、IMT と相関を示した。一方、未治療群では baPWV は LVMI、E/A、IMT との相関を示した。ROC 曲線解析による各種臓器障害の指標となる baPWV のカットオフ値は、治療群では 16 m/sec、未治療群では 18 m/sec であった。

【結論】 中高年高血圧症患者において、臓器障害の指標となる baPWV 値は治療群では 16 m/sec であり、

未治療群では 18 m/sec であることが示唆された。

P1-6.

高血圧とアルコール摂取および動脈の硬度の関連性について—6 年間観察研究

(大学院四年・内科学第二)

○松本 知沙

(内科学第二)

富山 博史、吉田 雅伸、山田 治広
椎名 一紀、山科 章

【目的】 アルコール摂取量と心血管イベントの J 曲線型の関係は既に報告されている。動脈の硬さの亢進は心血管イベントの危険因子であり、また血圧高値 ($\geq 130/85$ mmHg) は動脈の硬さの亢進に関与することを我々は報告している。本追跡研究ではアルコール摂取と動脈の硬さの変化、および血圧重症度の関連について検討した。

【方法】 対象は日本人、至適血圧・正常血圧症例 ($n = 955$)、および正常高値血圧・高血圧症例 ($n = 601$) (年齢 40 歳 \pm 8 歳、男性 1,279 人 女性 287 人) である。観察期間は 6 年とし、3 年毎に上腕一足首間脈波速度 (baPWV) の測定、およびアルコール摂取に関する問診を計 3 回実施した。

【結果】 アルコール摂取の問診により、対象者は以下の 3 群に分類された (アルコール非摂取群 (Non)、同少~中等量摂取群 (LiMo)、同多量摂取群 (Heav))。その結果、至適血圧・正常血圧症例では 6 年の追跡期間内において、LiMo 群での baPWV 増加は、他の 2 群のアルコール摂取群と比較し有意に低かった ($p < 0.05$)。しかし、この傾向は正常高値血圧・高血圧症例では認められなかった。一方、正常高値血圧・高血圧症例において Heav 群では baPWV 増加は他の 2 群と比較し 6 年の追跡期間内において有意に高かった。

【結論】 血圧重症度によりアルコール摂取が動脈の硬さの亢進に与える影響が異なることが示唆された。